
萩原雪歩誕生日記念 - クリスマス・エクスプレス -

山口多聞P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萩原雪歩誕生日記念 - クリスマス・エクспレス -

【Nコード】

N7181Z

【作者名】

山口多聞P

【あらすじ】

18歳の誕生日とクリスマス・イヴを迎えた765プロのアイドル萩原雪歩。親友の春香と真に祝福される彼女であったが、一番祝福して欲しいPが……

(前書き)

是非山下達郎さんの「クリスマス・イヴ」を聞きながら最後のシーンを読んで下さい。

「「「メリークリスマス!!!」」」

都内のあるビルの中の1室に、少女達の歓声とクラッカーの破裂音が響く。3人の少女が、12月24日のクリスマス・イヴと言うイベントを祝っていた。

それだけなら、日本全国どこでもある光景に過ぎない。

しかし、少女たちが囲む机の上に乗せられたケーキには、何故か誕生日ケーキのようなローソクが立てられていた。

「それから……」

「もう一つ……」

「「雪歩、誕生日おめでとう!!」」

「ありがとう。真ちゃんに春香ちゃん」

今日12月24日はクリスマス・イヴであると同時に、萩原雪歩の誕生日である。彼女の誕生日とクリスマスを、友人であり同じ765プロダクションのアイドルである菊地真と天海春香がお祝いしていた。

お祝いしている場所も、765プロの会議室だ。

「はい、雪歩。僕からのプレゼント。こっちは服で、こっちは時計

だよ」

真が包みと小さな箱を差し出す。

「ありがとう真ちゃん！私大切に使うよ」

続いて春香が包みを差し出した。

「私からはこのクリスマスケーキ兼誕生日ケーキと、帽子だよ」

「春香ちゃんもありがとう。2人ともわざわざ二つも用意してくれるなんて、私とっても嬉しい」

「クリスマスと誕生日だから、2つ渡さなきゃ悪いと思って」

「よく二つが重なると一つしかあげないなんて言うけど、それじゃあ申し訳ないし。雪歩は私たちの大切な仲間なんだから」

「そう言ってもらえると、とっても嬉しいよ春香ちゃん。他の皆と会えないのは残念だけど、皆もメールでお祝いしてくれたし、私やっぱり765プロのアイドルで本当によかったよ」

「皆忙しいもんね」

「千早たちも一緒にお祝いしたかったみたいだけど、今はニューヨークにいるらしいから」

765プロのアイドルたちは忙しい。特に雪歩と同期であったメンバーは皆Aランクの高ランクアイドルであるのだから尚更だ。遠くにロケや撮影に出かけて、集まることが出来なかった。それに如

月千早のように世界デビューしたもののや、三浦あずさや事務員の音無小鳥のように寿退社した者もいる。

そのため、直接雪歩の誕生日を祝えたのはちょうど休みが重なった春香と真だけであった。それでも皆、雪歩にお祝いのメールや電話、プレゼントをちゃんと贈っているのは、彼女らの絆の深さを窺わせるに充分である。

「でも雪歩にとって、一番お祝いしてもらいたいのはやっぱりPだよね？」

少しばかり意地悪げな表情で言う真に、雪歩も半ば笑いながら返す。

「もうやめてよ真ちゃん！」

「ふふふ。けど、実際のところ雪歩はどうなの？やっぱり雪歩も、Pさんが好きなんでしょ？」

「ええと……うん」

雪歩が顔を赤らめながら言う。

765プロのアイドルには一人一人にプロデューサーが付いている。最初の1年間、アイドルとPは心を一つにしてトップアイドルへの道を駆け上がった。

その結果、雪歩と同期のアイドルたちの多くは1年内外で皆Aクラスと言うトップクラスに登り詰めた。

世間からは765プロの奇跡とも呼ばれているが、そう呼ばれるのは何も短期間で全員をトップアイドルに育てたことではない。アイドルとPが出来る確立が非常に高いことだ。

事実、三浦あずさと秋月律子は担当Pと結ばれている。そしてそれはまだアイドルを続けている他の者たちにも言えたことだった。

「そうだよな。やっぱり皆、それぞれPさんは単なるパートナー以上の存在だもんね」

「雪歩はPさんのどんなところに惹かれたの？」

春香の問に、雪歩はちよっと考え込む。

「うーん、具体的には言えないんだけど。あの人は、私を新しい世界に導いて、足を踏み出させてくれた人だから。もしも、Pさんと出会えていなかったら、私は今もあの頃のダメダメな自分のままだったと思うんだ。だからかな？あの人を好きになったのは」

雪歩の表情は、何時の間にか恋する乙女のそれになっていた。

「いいね。けど、そのPさんが雪歩の誕生日にいないなんて残念だね」

真が心底残念そうに言う。雪歩が恋したPは、事務所内に姿形もなかった。

「仕方が無いよ。けど、午後の新幹線で夕方までには帰るって言っていたから、2〜3時間もすれば着くんじゃないかな？」

「そうだね。京都からなら2時間もあれば着くもんね」

「Pが一体どんなプレゼントと言葉を雪歩に贈るのか楽しみだね」

と春香が言った時、雪歩の携帯が鳴った。

「あ、電話だ。もしもし……あ！Pさん。どうかしたんですか？」

どうやら電話の相手はPらしかった。雪歩は極上の笑顔を浮かべたが、電話を掛けている内に表情が暗くなっていた。

「ええ！？本当ですか？……そうですか。わかりました。それじゃあ仕方が無いですね。……いえ、Pさんのせいじゃないですから。Pさんも気をつけて帰ってきて下さい。それじゃあ……はあ」

電話を切った雪歩の顔は、先ほどと打って変わって沈んでいた。

「どうしたの雪歩？Pさんに何かあったの？」

真が尋ねると、雪歩が小さく頷いた。

「うん。新幹線が雪で止まって、何時動くかわからないんだって。もしかしたら、今日中に帰ってくるのも無理かもしれないって」

「何だって！」

「そんな、雪歩の誕生日なのに」

「仕方が無いよ真ちゃん、春香ちゃん。お天気ばかりはどうにもならないよ」

と雪歩はもはや諦めていた。と言うより、諦めなければ自分自身が哀れに思えたのかもしれない。

しかし、彼女の親友たちは諦めの悪い人間だった。

「けどこれじゃあ雪歩が可愛そうだよ」

「そうだよ。神様も意地悪すぎるよ。何で雪歩の誕生に限ってこんなことするんだろっ」

「2人ともありがとう。けど、私にもどうにもならないよ」

親友達の言葉はありがたいが、実際に雪歩の力でどうにかなるとは思えなかった。

しかし、ここで引き下がるようではアイドルではない。特に真と春香は簡単には諦めないほど、まっすぐな人間であった。

「いや、諦めちゃ行けない!」

「そっだよ雪歩。何とかすれば今日中にPさんと会えるかもしれないじゃない!」

「真ちゃん、春香ちゃん……うん」

「本日は雪のため、列車が大幅に遅れましたことお詫び申し上げます。まもなく終点の東京駅です。接続する在来線に御注意ください」

車内に東京駅到着のアナウンスが流れる。疲れきった乗客たちが、荷物を降ろしたり、コートを着たりして下車に備え始める。

その中に、Pの姿もあった。

午後遅くになり、雪が小降りとなったことから新幹線の運転はようやく再開された。しかし、その後も続くダイヤ乱れや徐行運転によって遅れに遅れ、日付も変わるうかと言う時刻の到着になってしまった。

「11時40分か。今日中に雪歩に渡すのは無理だな」

Pは鞆の中に入れた小箱に手をやった。彼が雪歩に用意したプレゼントだ。

なんとか今日中に渡したかったが、この時間では雪歩と会える望みなどありえなかった。

「ごめんな雪歩。こんなダメなPで」

新幹線が東京駅へと到着し、扉が開いた。

「東京。東京です」

ホームに降り立ったPの耳に、到着のアナウンスが響く。そしてホーム上には家路を急ぐ多くの乗客たちの姿があった。

「やっと着いた。どうやって家まで帰るもんかな？」

階段へと向かう人の流れに乗りながら、これからどうするか考える。

そして階段を降りようとしたところで、彼は人の波に逆らうようにホームに立っている小柄な影に気づいた。

「うん？……まさか！」

信じられない想いを抱きながら、Pはその影に近づいた。

そして確信した。その正体は今自分が一番会いたかった人である。

「雪歩！」

「P……」

雪歩は泣きそうな顔をしながら、Pに走り寄って来た。

そして2人は、ホーム上であることも忘れて抱き合った。

「どうしてここに……？」

「どうしてもあなたに会いたい夜があったんです。だから、会いにきちゃいました」

「まさか俺の乗る新幹線の到着時刻や、どこに乗っているかメールで聞いたのは……全く。無茶して。下手すれば補導されるぞ」

すると、雪歩は少しムツとした。

「今日でもう18歳ですよ!」

「ああ、ごめんごめん。本当にありがとう。そしてごめん。雪歩の誕生日を殆ど祝ってやれそうにないや」

既に時計は12時を回ろうとしていた。これでは言葉の一つ、二つを掛けるのが精一杯だ。

しかし、雪歩はそんなこと気にしないと云わんばかりの表情で言い返す。

「気にしないでください。私にとって、帰ってくるあなたが最高のプレゼントですから」

「……本当にありがとう。少し遅くなったけど、俺からのプレゼントを渡してもいいかな?」

「はい」

Pは鞆の中から、小箱を取り出した。

「お誕生日おめでとう。そしてメリークリスマス雪歩」

「あ、あのこれって?」

「開いて見てくれるかな?」

雪歩は無言で箱を開けた。その中には、一つの指輪が入っていた。

「Pさん!？」

「その、すぐに返事はいいんだ。けど、雪歩が18になったらこれだけは行っておきたかったんだ……何時までも、俺の隣にいて欲しいんだ。だから、俺と……雪歩?」

Pは雪歩の顔を涙が伝っているのに気づいた。

「本当に私でいいんですか？」

「当たり前だ。冗談でこんなこと言えるかよ。俺にはもう、雪歩しかいないんだ」

「……ありがとうございます!こんな嬉しい誕生日プレゼントはありません!」

「雪歩」

「Pさん、早く続きをお願いします。もうすぐ12時です」

「そうだった。雪歩、俺と結婚して下さい!」

「……はい。こんな私でよければ」

雪歩が言い切った瞬間、時計の針は12時を指した。

その瞬間、雪歩の18回目の誕生日とクリスマス・イヴは終わりを告げた。それはPと過ごせたほんのわずかなクリスマス・イヴの終わりでもあった。

しかしながら、この極僅かなクリスマス・イヴこそ、彼女にとって生涯最高のクリスマス・イヴとなることだろう。

・ジングルベルを鳴らすのは帰ってくるあなたです

オマケ

「くう！雪歩とP、素敵だな！」

「本当。私もPさんに告白される時は、あんな風にロマンチックに告白されたいな」

雪歩とPから少し離れた柱の影で、真と春香は一部始終を見ていた。

「そうだね。2人にはいいものを見せてもらったな」

「けどこのまま隠れて見ていちゃ、何か悪いね」

「そうだね。告白も終わったみたいだし、雪歩のPを驚かせてやる
う！」

「うん！」

2人はホーム上で抱き合っている2人に向かって走って行った。

(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

そして雪歩誕生日おめでとう!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7181z/>

萩原雪歩誕生日記念 - クリスマス・エクスプレス -

2011年12月24日08時49分発行